社会との連携・交流から学ぶ家庭科授業

―衣生活のユニバーサルファッションを課題事例として―

Home economics classes taught in partnership with society and exchange

-A Case Study of Universal Fashion in Clothes Life-

夫馬佳代子[1]

FUMA Kayoko[1]

［キーワード Keyword］　家庭科，小中学校，衣生活，教材，授業実践

［所　　属 Institution］　[1]岐阜大学大学院（Graduate School of Education, Gifu University）

［要　　旨］

核家族が多くみられる今日、身近な生活環境において高齢者や衣生活に問題を抱える者の実感や意識、願いを具体的に捉える事が難しい面もある。こうした状況は、高校生及び大学生、また家庭科教員を目指す学生において同様であることが推測できる。高齢者や障害のある方の立場で衣生活を捉え、衣服生活の問題点を検討する教材開発は管見の及ぶ限り見られない。

そこで、本研究室では、これまで教員養成系大学の被服教育の一環として、ユニバーサルファッションの考案及びその教材化に取り組む実践活動の提案とその教育的な意義についての考察を試みたが、本報では改めて、これまで報告した教材開発の内容について「社会と連携した家庭科の授業実践」の視点で相互の関連性を示し、これからの家庭科の可能性についての提案を試みる。また、大学における被服教育の試みとして、実社会と当事者である高齢者や体が不自由な方などの着用者と共に考案するユニバーサルファッションの教材開発について、改めてその教育的効果について、これまでの研究報告のまとめとして若干の考察を加える。

１．研究の背景と目的

高齢化社会となった今日、家庭科教育においても高齢者の問題を具体的に生活課題として様々な観点から取り組まれている。衣生活においては、高齢者衣料やユニバーサルファッションについての研究や衣服の開発に多く取り組まれている。中学校『技術・家庭』においても、ユニバーサルファッションについての課題が提示されている。[1)]

しかし一方で、核家族が多くみられる今日、身近な生活環境において高齢者や衣生活に問題を抱える者の実感や意識、願いを具体的に捉える事が難しい面もある。こうした状況は、高校生及び大学生、また家庭科教員を目指す学生において同様であることが推測できる。高齢者や障害のある方の立場で衣生活を捉え、衣服生活の問題点を検討する教材開発は管見の及ぶ限り見られない。

そこで、本研究室では、これまで教員養成系大学の被服教育の一環として、ユニバーサルファッションの考案及びその教材化に取り組む実践活動の提案とその教育的な意義についての考察を試みたが、[2)-6)] 改めて、こうした教材開発報告の相互の関連性について「社会と連携した家庭科の授業実践」の視点で捉え直し、これからの家庭科の可能性についての提案を試みる。

これまでの「社会と連携した家庭科の授業実践」に関する具体的な教育活動としては、実際に高齢者及び体の不自由な方の生活実態を観察し、衣生活に関する課題を明らかにした上で、当事者及び介護者と共に衣服の考案に取り組み、中学生を対象とした教材作成に取り組む一連の活動に取り組んだ。[7) 8)]

具体的な、ユニバーサルファッショの製作過程等については、「高齢者用衣服の考案－寝たきり状態の方が着用する快適な衣服開発の事例－」（2016）[9)] において報告している。

大学における被服教育の試みとしては、実社会と当事者である高齢者や体が不自由な方などの着用者と共に考案するユニバーサルファッションの教材開発とその教育的効果について検証を試みてきた。[10)]

本報の「社会と連携した家庭科」構想の主な視点として、①小中高校の家庭科において、児童・生徒の視点から異世代の実際の生活課題（本研究では衣生活の課題に実感を持って体験）に取り組む、②開発した考案服を高齢者が日常的に着用し、家庭科教材が社会との繋がりを持つ、③小中高生の発達段階に応じた教材研究を試み、生涯にわたり生活創造の発想を育成する方策を検討する試みは、管見の及ぶ限り3つの視点を組み合わせた授業研究は見られない。上記の視点で、これまでの授業実践報告の相互の関連性と社会と連携した家庭科教育の効用に関する一考察について述べる。

２．方法

（１）授業開発の手順

授業の開発は以下に示す5つの段階で行なった。[11)]

①高齢者の衣生活の課題を捉えた協力者のインタビュー教材の作成。

②高齢者の衣服着脱実体験の模擬体験を通し実感を伴い学ぶ。

③高齢者と共に着易い衣服を考案する。

④習得した基礎技術を生かして製作する。

⑤考案・製作した改良服を高齢者が着用し評価・検証する。一連の活動の教育効果を検証する

（２）授業実践

研究対象とした授業実践の時期・対象・回数は以下の通りである。

2005年：中学生1年対象（全13回）[12)]

2014年：中学生1年対象（全６回）[13)]

2016年：中学生1年対象（全20回）[14)]

各年度の授業実践の対象は中学1年全クラスであり、授業の位置づけは衣服の選択の発展課題としてユニバーサルファッションについて取り組んだ。

３．結果及び考察

（１）授業実践の構想

これまでの授業実践の関連を示す構図を図１に示す。

図１に示す授業構想は、衣生活を通して現状の生活問題の解決について実践的に取り組める家庭科教材の開発と検討を目的にしたものである。

具体的には、社会の高齢者人口が増加している現状に家庭科でも対応し、高齢でも着用し易い衣服について考案する教材開発と高齢者当事者の願いをもとに社会と連携して考案・製作し、高齢者が考案服を着用し評価・検討する一連の生活創造の学びを実践する授業構想である。

授業構想は、以下の6つの要素から構成されている。

①異世代の衣生活現状や願いを生徒が把握できるように協力者にインタビューし、映像教材を作成する。核家族の家庭であっても、年齢と共に体の状態や衣服着脱の難しさに気付く。

②高齢者の衣生活模擬体験を通して、生徒が実感を伴い衣服着脱の困難さについて検討する。

③小中段階で習得した基礎知識・技能をもとに高齢者の衣服を考案･創造して製作する。の基礎技術習得が、将来どのような形で生活に生かし創造することができるかの見通しも持つ。

④考案服の評価・検証を、高齢者が着用して着易さを評価する。

⑤家庭科の学習成果を社会にも反映し社会貢献を実践。考案服を高齢者の生活の中で活かす

⑥衣生活の改良に当事者高齢者も小中高生と共に考案し、協働と生涯にわたる家庭科を実践する。考案した衣服を日常着用することにより衣生活が改善できたのかを検証・評価する。

これらの授業構想の6つの項目についての実践内容について具体的に述べる。

（２）構想図に示す６つの実践内容

１）異世代の衣生活の現状と願いを把握

図２は、中学生が異世代の衣生活の現状と願いを把握するための教材作成の実践活動を示す。

異世代の衣生活現状や願いを生徒が把握できるように協力者にインタビューし、映像教材を作成する。核家族の家庭であっても、年齢と共に体の状態や衣服着脱の難しさに気付くことをねらいとする。授業実践では、導入段階で異世代の衣生活の現状と願いを把握し、関心を高めることを意図する。

２）高齢者の衣生活模擬体験

図３は、高齢者の衣生活における日常の衣服の着脱の擬似体験を通して、生徒が実感を伴い衣服着脱の困難さについて検討する実践を示す。図3に示す着脱の写真は、軍手を二重にはめて、日常着用している衣服のボタンがはめれるか、後ろファスナ-がしめれるか、紐が結べるか等、衣服の着脱行為を検証する活動を示す。

授業実践では、展開段階で実践する活動として想定する。

３）高齢者の衣服の考案

図４は、小中段階で習得した基礎知識・技能をもとに高齢者の衣服を考案･創造して製作する活動を示す。この実践活動を通し、基礎技術習得が将来どのような形で生活に生かし創造することができるかの見通しも持つことも意図している。

図4に示す写真は、中学生が高齢者の着脱の擬似体験を通し、グループで衣服の改良・工夫点について交流し、発表した内容を示す。留め具の改良や衣服形態の工夫、材質の改良等、衣服の構成を多様な視点で捉えることができる。

この実践活動は、授業実践の展開段階の交流・発表の学習活動を示す。

４）考案服の評価・検証

図５は、考案服の評価・検証を、高齢者が着用して着易さを検証し、評価する実践を示す。授業において考案した衣服が、実際に高齢者に着用され、着心地等についての感想・評価を知ることにより、実践的な

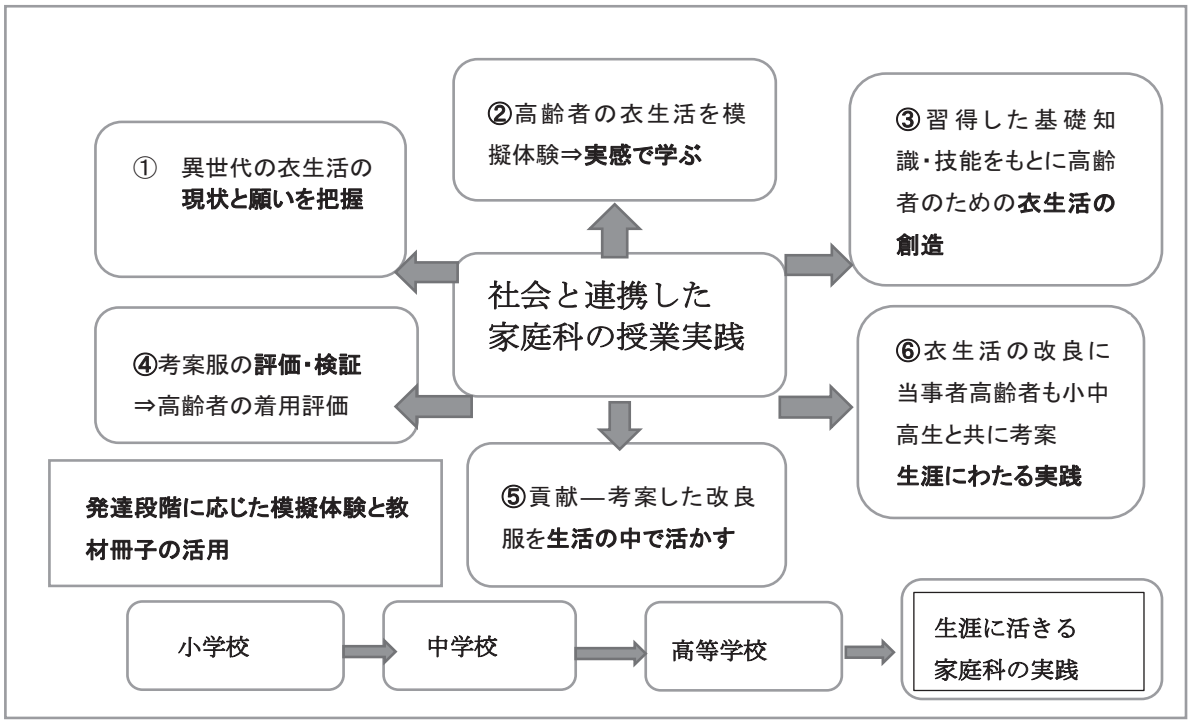

図１．社会と連携し異世代と交流する家庭科の授業実践

①　異世代の衣生活の現状と願いを把握

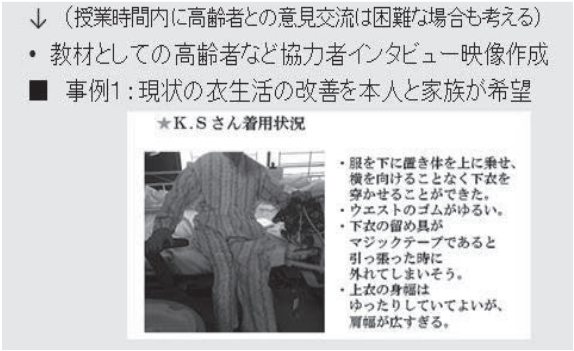

図２．授業実践の構想図①　[15]

②　高齢者の衣生活を模擬体験⇒実感で学ぶ

図３．授業実践の構想図②　[16]

③　基礎知識や技能をもとに衣生活の創造

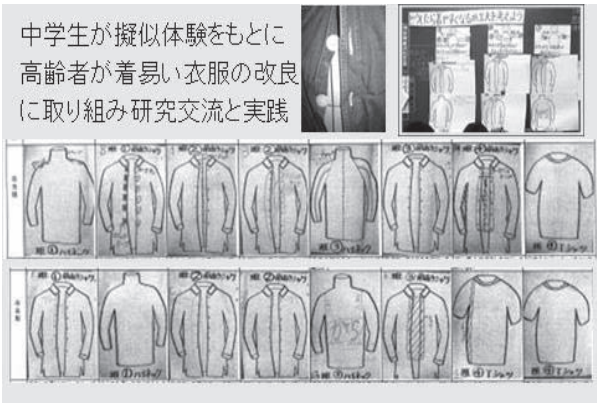

図４．授業実践の構想図③
2014　[17]

④　考案服の評価・検証

図５　高齢者の考案服の着装評価・検証
2018　[18]

学びに発展させることができる。中学生が製作することも可能であるが、家政系の大学生とも連携し製作することにより、相互交流の学びに発展する。

また、考案した衣服の形態やファスナー等の留め具の位置により、着脱の手の動線が異なる。図５に示す写真は、考案した改良服を高齢者が着脱する行為を、両手の甲にシールを付け撮影し、シールの動線を着脱時の右手・左手の動きを４色で示す。中学生が検証できる簡易な方法でも、写真に示すように、着脱で両手の動きが異なることが分かる。考案した衣服を５種類ほど比較することにより、高齢者が着易い衣服を客観的に捉えることが可能となる。

５）考案した改良服を生活の中で活用

図６は、家庭科の学習成果を社会にも発信する提案を示す。具体的には、授業内で考案した改良服を高齢者の生活の中で活用し、社会貢献にも発展する活動の実践を示す。写真は、高齢者の衣生活調査をもとに大学生が当事者の高齢者・介護者などと意見交流を通して製作した改良服を示す。今日家庭科の被服実習の時間削減が課題となっているが、中学生、高齢者、大学生など異なる立場で衣服の改良について考え、製作する実践活動は、被服製作の学習で習得すべき内容の発展にも繋がると考える。

６）衣生活の改良に当事者高齢者も小中高生と共に考案

図７は、衣生活の改良に当事者高齢者も小中高生と共に考案し、協働と生涯にわたる家庭科を実践する提案を示す。小中高校生が考案した衣服を高齢者が日常着用することにより、衣生活が改善できたのかを検証・評価する。こうした直接社会とつながり、協働と生涯にわたる家庭科の被服教育を提案する。

（３）構想図をもとにした授業実践

表１は、構想図をもとにした授業実践を示したものである。

１）授業実践の概要

この表には、各年度の授業構想の１．導入段階、２．展開段階Ⅰ、３．展開段階Ⅱの活動を示す。

各年度で用いた教材は、以下の通りである。

教材①は高齢者の生活実態、教材②は改良衣服の実物・事例、教材③は活用した資料（副読本用の冊子など）の３種に分けて示す。

各年度の授業の特徴について示す。

２）授業内容（導入段階）

2005年度では、導入段階で高齢者施設での聴き取り調査の様子を紹介し、高齢者の衣生活の感想を聞く。高齢者等体が不自由な人の服を見て、其の工夫点を探すなど、本時の授業内容に興味・関心を持たせる。2014年、2016年は、導入段階で高齢者の衣生活の実態と課題について写真や映像を通して知る。また高齢者の衣生活実態をもとに学生が改良した考案服の事例示し観察する。こうした情報をもとに衣服の工夫点を探すなど興味・関心を引き出し、高齢者が抱える衣生活の問題に気づく。

３）授業内容（展開Ⅰ）

１．疑似体験－各年度ともに、高齢者や体が不自由な人の衣生活の擬似体験を行う。疑似体験を行う用具については各年度で工夫する。

２．衣服の考案－擬似体験を基にだれもが着易い衣服の考案に各自で取り組む。その後グループ内で交流する。

４）授業内容（展開Ⅱ）

各年度共通して、疑似体験をもとに考案した衣服工夫点についてグループ・全体発表を行う。発表内容を形態や材質に分類して検討する。

５）教材①高齢者の生活実態

生活環境が異なる生徒においても高齢者の生活実態について実感を伴い学べるよう、写真資料やVTR等を活用して生活実態を紹介する。2005年は高齢者へのアンケート調査、2014年は高齢者施設の実態調査、2016年は生活の中にユニバーサルデザインまで視点を広げて、高齢者の生活実態について知る。

６）教材②改良衣服の実物事例・実物標本

生徒が具体的にユニバーサルファッションを捉えれるよう、高齢者の願いをもとに教師、学生が製作した高齢者衣服の改良事例の標本を示す。

2005年は車イスの学生用改良衣服の製作。高齢者用の改良衣服、2014年は高齢者の願いに対応した考案服8種、2016年は既製服に着脱が簡易になる改良を加え改良服の標本（8種）として展示する。

７）教材③資料や副読本冊子の活用

衣服を考案する上での参考資料として生徒が活用する参考資料として、2005年は障がいがある女性の出版書籍を朗読して活用、2014年は高齢者の願いを学習プリントに記載、2016年はユニバーサルデザインについてのパンフレット資料を作成し活用する。

（４）授業実践の事例（2014）

図８は、授業の構想図にもとづいて実践した2014年の授業実践の事例を示したものである。

図８に示す①教材準備は、標本として高齢者の要望をもとにした衣服改良の製作事例を示した。製作事例と

⑤貢献―考案した改良服を生活の中で活かす

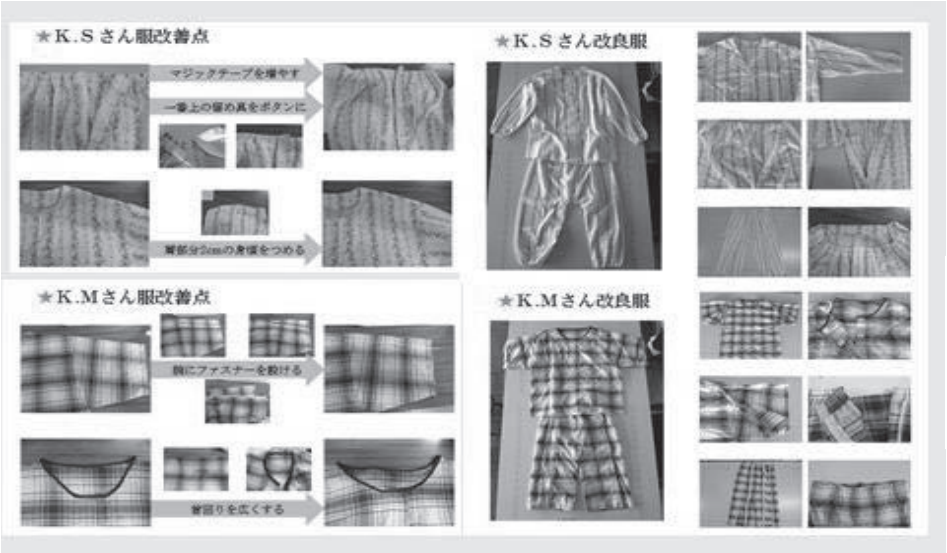

図６．授業実践の構想図　⑤[19]
2016　製作：河野

表１．ユニバーサルデザインに関する授業実践（2005・2014・2016）

授業実践	実践回数	授業対象	1. 導入	2. 展開Ⅰ	3. 展開Ⅱ	教材①高齢者の生活実態	教材②改良衣服の実物・事例	教材③副読本冊子の作成	授業の特徴	授業実践内容の記録参考文献
2005年	13回	中学生	高齢者の衣生活の感想を聞く標本−高齢者等体が不自由な人の服を見て、工夫点を探す。	1・体が不自由な人の衣生活の擬似体験 2. 体験を基にだれもが着易い衣服の考案	3. 4つの体の障がいに対応し考案した衣服工夫点についてグループ・全体発表。（図4参照）	アンケートでは具体的にイメージできないが多い。高齢者の衣生活は口頭で紹介。	車イスの学生用改良衣服の製作。高齢者用の改良衣服も紹介。	『装いは自己表現』障害がある女性の手記を朗読	全4時間で実施し、1・2時間目は自分の衣服選びを実施。既製服が選べない高齢者の衣服に発展して考察。	古田・夫馬（2005）「家庭科における生活創造能力の育成を目指した授業実践」
2014年	6回	中学生	高齢者の衣生活の実態と課題について知る。標本−高齢者の衣生活実態を改良した考案服の事例を観察。衣服の工夫点を探す。	1・高齢者衣生活の擬似体験。2. 体験を基にだれもが着易い衣服の考案	3. 疑似体験をもとに、各自で衣服の考案。考案した衣服工夫点についてグループ・全体発表。形態や材質からも検討。	高齢者の衣生活の実態及び課題について、高齢者施設で聴き取り調査。調査結果を紹介。	シャツの腋にマチを入れた服。女性上衣肩が開く服等高齢者の願いに対応した考案服。	高齢者の衣生活の願い・課題を学習プリントに記載。5人の高齢者の声を印刷。	高齢者施設での聴き取り調査をもとに学生が改良服を標本として紹介。改良服を高齢者が実際に着用して、改良により着脱が容易になったか評価する。	土屋・夫馬（2014）「中学校家庭科におけるユニバーサルデザイン教育の提案―生活実態をもとにした教材開発と実践授業報告」
2016年	20回	中学生	高齢者の衣生活の実態と課題について知る。標本−高齢者の衣生活実態を改良した考案服の事例を観察。衣服の工夫点を探す。	1・高齢者衣生活の擬似体験。疑似体験の方法は前回と同様。（図参照）2. 体験を基にだれもが着易い衣服の考案	3. 疑似体験をもとに、各自で衣服の考案。考案した衣服工夫点についてグループ・全体発表。形態や材質からも検討。	生活の中のユニバーサルデザインについて考えた後、高齢者の衣生活の実態について紹介	既製服を着脱が簡易になる改良を加え展示。、既製服のボタンやホック等の留め具と比較する。	ユニバーサルデザインについてのパンフレット資料	日常生活におけるユニバーサルデザインについて関心を持たせた上で、高齢者や障がい者の衣生活の問題について気付かせる。生徒の具体的な発想が得られた。	山浦・横山・夫馬（2016）「中学校の家庭科におけるユニバーサルデザイン教育」

⑥衣生活の改良に当事者高齢者も小中高生と共に考案　　生涯にわたる実践

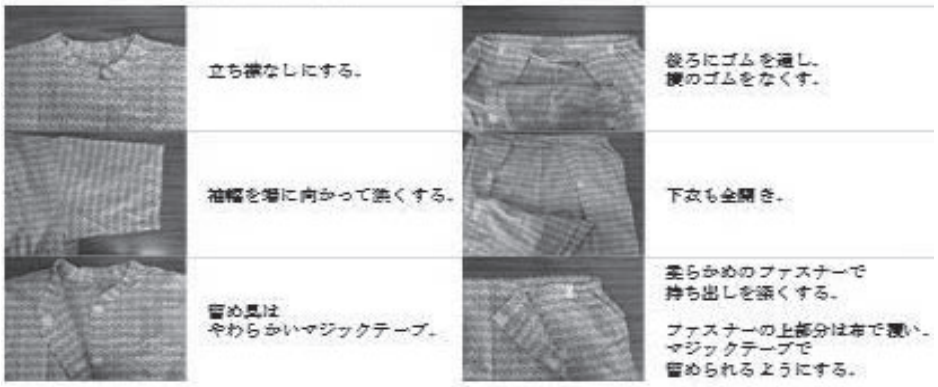

図７．授業実践構想図⑥

しては、袖下にマチ、前ボタンをファスナー、袖口をマジックテープ等、小学校で習得した基礎技術を用いて衣服も改良を提案する。（写真１～４）

②導入段階では、高齢者の着脱の写真（写真５・６）や高齢者が既製服を着用する行為の動作の記録(図９）を見る。

③展開Ⅰでは、高齢者の衣服着脱の疑似体験として、手に軍手2枚を重ねてボタンをかけ（図８写真7）、着装する（図８写真8）体験を各自実践した。

④展開Ⅱでは、疑似体験を基に各自で衣服を考案し、グループ交流を行い、発表した考案事例を紹介する。

（５）疑似体験の生徒の感想と考案

展開Ⅱにおける生徒が考案した改良服についての記述例として「上衣はセーターのようにゆるめで顔が出し易い。ペットボトルの巾着のように片手で首元をしめれるしくみで風は入りにくくする。下衣はファスナーで着脱可能。脇がスカートのようにファスナーかスナップで開ければ（ズボンを）脱ぐときに片足を上げなくて着れる。感想とし日頃から衣服を着ることに困っていなかったので、衣服をアレンジすることは思っていたよりも大変だった」等の記述が見られる。同様に疑似体験をもとにした感想とし「特徴は材質－伸縮性のある布で着易く、構成は肩をマジックテープで開閉し上衣に布をスカート状に巻き固定し、外見はワンピース状だが腕肩が動かなくても着用可能。感想は運手をはめた疑似体験で高齢者の大変さを知った」、「特徴はゆとり－全体的に体と衣服の間にゆとりを持たせ、冬服の場合､風が入らぬよう袖口･裾にゴムを入れる。感想は高齢者の大変さが疑似体験から良く分かった。片手で着られるデザインを考えた」と記述される。[19]疑似体験後の生徒の感想の中には、考案した衣服の種類が異なる場合でも､「留め具のボタンかけの難しさ」と「袖部分の腕の通す行為の難しさ」に着目している傾向が見られた。こうした生徒の考案服の発想を見ると衣服の擬似着脱体験の影響が考えられる。

（６）考案した改良服の視点

上記に高齢者の擬似体験をもとに考案した改良服の事例を示したが、図10は、具体的に生徒の考案した改良服に記載された改良箇所１つを、一箇所として数え改良箇所の数を示したものである。男子は改良点を４箇所、女子は５箇所考案した生徒が多いが、全体的に３～５箇所の改良点を提案したことが分かる。[20]

一方で事前調査の裁縫の習熟度との関連を見ると、裁縫できないと回答した生徒は｢改良案なし｣が多い。図11は、生徒の考案した改良服の改良の視点（学習プリントに記載したイラストで示す改良部分）を示す。図11から、生徒の改良の発想は、上衣では袖口部分を改良する発想、次いで前開き部分、襟元部分、脇部分の改良案が多いことが分かる。袖口や衿元の開き部分から風が入らぬように開口部を締める発想は、高齢者の願いが影響していることも考えられる。下衣の改良部分では、下衣の外側部分、次いでウエスト部分、下衣の裾部分があげられる。下衣の外側部分の改良は、外側がファスナーで開き「足部分が出せる工夫」の提案が多い。ウエスト部分は｢体が楽なようにゆるめに｣、下衣の裾部分も「風が通らぬように締める」等の工夫が見られる。[21]

また衣服を改良する手段として用いた方法としては、改良案に最も多く用いられたのは、着用する衣服の留め具として「面ファスナー」（175）を用い指先が動きにくい場合でも簡単に留められる方法、次いで簡単に着脱できるように衣服の「形態を大きく」して着易くする発想（146）、次いで「ゴム」を用いて簡単に着脱できる方法(122)を提案している。[22]

生徒の改良の発想が、導入段階で示した改良衣服の標本及び高齢者の衣生活の願いの内容、また展開段階での疑似体験としての衣服着脱行為の影響など、授業での支援内容と生徒の発想との関係については、今後の検討課題である。

（７）被服教育としての可能性と課題

中学校の家庭科における衣生活に関する教育は、被服製作に取り組む授業時間を削減する傾向もみられる。中学校の衣生活教育として､今後どのような学習活動、能力の育成が必要であろうか。

本授業開発では、図１に示す授業実践の構造図に示したように、高齢化社会である現代の社会問題に衣生活の観点から問題解決に取り組む一連の活動を通して、中学生の自分自身の衣生活のみでなく、現代の既製服社会に対応できない人々の衣生活実態と衣生活の抱える課題を知り、社会と連携する中で新たな衣服を創造する活動、さらに考案した衣服を実際に高齢者が着用することにより検証する活動を実践し、中学生が高齢者の立場に立ち、多様な視点で衣生活を「創造する」可能性を示すことができた。しかし、生徒が考案した衣服の発想が授業内容及び教材､また高齢者の要望等、どのような影響を受けて創造されたのかは定かにしていない。

今後の課題として、生徒が衣服を考案する発想の過程を明らかにしていきたい。

①授業準備段階

写真1. 袖下にマチ

写真2. 前ボタンをファスナー

写真3. 袖口をマジックテープ

写真4. 肩を開きかぶって着れる

②　導入段階　改良衣服の着心地を高齢者が確認

写真5. 襟元をしめる動作

写真6. 袖口をしめる動作

③　展開Ⅰ　高齢者の衣服の着脱の疑似体験

写真7. 手に軍手2枚重ねボタンをかける

写真8. 着る

④　展開Ⅱ　疑似体験を基に衣服の考案　発表　（考案事例）

図８．中学校家庭科のユニバーサル教育の授業実践事例（2014年）[23)]

（参考文献：土屋明代・夫馬佳代子（2014）「学校家庭科におけるユニバーサルデザイン教育の提案」）

図９．　高齢者による考案衣服の着脱による快適性の検証[24)]

	男子	女子	総計	裁縫ができる※1	裁縫ができない※2
改良なし	15	5	20	7	13
改良箇所1	13	6	19	15	4
2	19	14	33	24	9
3	13	19	32	26	6
4	18	20	38	30	8
5	11	24	35	25	10
6	8	10	18	12	6
7	3	6	9	6	3
8	2	0	2	2	0
9	0	1	1	1	0
10以上	0	1	1	0	1
	102	106	208	148	60

※1：事前アンケート調査「裁縫が得意」「まあまあ得意」
※2：事前アンケート調査「あまりできない」「できない」

図 10．体験授業後の考案服の改良箇所の数　[25)]

上衣服の改良部分	
えりもと	56
前開きの開き部分	69
肩部分	16
脇部分	58
袖口	98
腕部分	25
脇腹部分	15
上衣裾	19
上衣全体	49
上衣その他	38
下衣の改良部分	
ウエストの部分	44
下衣の外側部分	55
下衣の内側部分	14
ズボンの脚の前部分	4
下衣の裾	38
足部分	11
下衣全体	58
下衣その他	43

※一人の生徒が複数改良点を記入した場合も含む。
（2014 年授業実践より：　土屋）

図 11．生徒の考案した改良服の視点　[26)]

（学習プリントに記載したイラストで示す改良部分）

４．まとめ

本研究室では、小中高の家庭科において異世代の高齢者の衣生活の実態と課題を把握する上で、実感を伴った学びの教材が少ない状況を捉え、基礎的な知識・技術を応用として衣生活の創造に取り組める授業実践と教材開発に取り組んだ。

本報は本研究室の学生が卒業研究として授業実践に取り組み、各年度に報告してきた教材研究の相互の関連性について、「社会との連携から学ぶ家庭科の構想」の視点から捉え、まとめたものである。

授業の構想には、高齢化社会を反映して、衣生活の視点から、高齢者の衣生活の実態を把握した上で、実感を伴う学びを提案した。

具体的には、衣服の改良を希望する高齢者に協力を得て、以下に示す６段階の過程を経て、ユニバーサルファッションの提案を試みた。

① 高齢者の衣生活の実態調査
② 衣生活での問題点を検証
③ 衣生活の状態を改善するための衣服形態考案（本人と家族、製作者の３名で考案する）
④ 試作服を１週間着用して、着用後の意見や感想をのべ、改良点を提示
⑤ 着用者の衣生活環境を改善する衣服の考案
⑥ ユニバーサルファッションへの提案

上記に示す、衣服の改良は、全て小学校・中学校の家庭科で習得した被服の基礎技術を用いる。習得した技術が、今後の生活や衣服を考案する上でも活用できることを実感として捉えることを意図した。

高齢者の願いを中学生に伝える教材開発、さらに高齢者の着脱の問題について疑似体験を通して考え、小学校で習得した基礎技術を活用し、衣服の考案に取り組む学習活動に取り組んだ。

その結果、授業実践の発表成果とし、各年の授業実践でも中学生段階で多様な視点の衣服が考案された。こうした授業実践から、中学生の家庭科においても衣生活の創造プロジェクトに取り組むことが可能である見通しが見られた。

今後の課題として、中学生の衣服の創造に与える教材の影響について、検討を試みたい。

これまでの授業実践研究にご協力いただきました岐阜市内の小中学校の皆様に深謝いたします。

また卒業研究として、高齢者衣服の開発および授業実践に取り組み研究発表に取り組むなど多くの学生が本研究に携わり報告した。

なお、本研究は、科学研究補助金「ユニバーサルファッション関する教材開発」（基盤研究(C) 16K00784）の支援を受けたことを報告する。

【注釈】

１）中学「技術・家庭」家庭編の衣生活における応用課題として教科書に掲載される.

２）古田典子・夫馬佳代子.（2005）．家庭科における生活創造能力の育成を目指した授業実践―創造と自己解放の家庭科教育（４）―．岐阜大学教育学部研究報告　教育実践研究，７，103－114.

３）古田典子・夫馬佳代子・杉原利治.（2005）．生活創造能力の育成を目指した授業の分析①課題の捉え方の推移―創造と自己解放の家庭科教育（５）―．岐阜大学教育学部研究報告,教育実践研究　７.119－128.

４）古田典子・夫馬佳代子・杉原利治.（2005）．生活創造能力の育成を目指した授業の分析①課題の捉え方の推移―創造と自己解放の家庭科教育（５）―．岐阜大学教育学部研究報告，教育実践研究　７．119

－128.

５）土屋明代・夫馬佳代子．（2014）．中学校家庭科におけるユニバーサルデザイン教育の提案―生活実態をもとにした教材開発と実践授業報告―．岐阜大学教育学部教師教育研究，10，199－210.

６）山浦はるか・横山真智子・夫馬佳代子．（2016）．中学校の家庭科におけるユニバーサルデザイン教育．岐阜大学教育学部研究報告,教育実践研究，　第18巻，199－210.

７）奥村若奈・夫馬佳代子．（2018）．衣服の留め具と着脱支援に関する衣服教材の開発．岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究，20．79－87.

８）村井 良妃・横山 真智子・夫馬 佳代子（2019）．中学生を対象としたユニバーサルデザインの教材開発（1）－教材用衣服の製作をもとにした補助教材冊子の作成－ 教育学部研究報告 自然科学 43 107-116 2019年3月.

９）河田祐里，夫馬 佳代子（2016）高齢者用衣服の考案 - 寝たきり状態の方が着用する快適な衣服開発の事例 - 岐阜大学教育学部研究紀要（自然科学） 40 165-173 2016年3月.

10）高齢者衣服の開発研究に関して、あおい在宅診療所の協力を得て高齢者への聞き取りを実施した.

11）高齢者へのインタビューはデイサービス施設の協力を得て、高齢者を対象とした手芸サークルを作り、モノづくりを通して意見交換を行った.

12)授業実践内容は注２）研究報告を参照.

13)授業実践内容は注５）研究報告を参照.

14授業実践内容は注６）研究報告を参照.

15)高齢者の衣生活の具体的な願いは注９）「高齢者用衣服の考案 - 寝たきり状態の方が着用する快適な衣服開発の事例」報告に記載.

16)中学生の疑似体験について注５）注６）記載の授業実践報告を参照.

17）図４出典は、注２）「家庭科における生活創造能力の育成を目指した授業実践―創造と自己解放の家庭科教育（４）」授業実践報告.

18）注７）参照。12種類の改良衣服を製作（奥村若奈製作）し、各改良服の着脱調査を試み着用者が評価する.（着用者には写真掲載等の許可を得ている.）

19)図９は注５）「中学校家庭科におけるユニバーサルデザイン教育の提案―生活実態をもとにした教材開発と実践授業報告―」出典。（改良服の着用者には写真掲載等の許可を得ている.）

20）注５）実践授業報告書参照.

21）注５）実践授業報告書参照.

22）注５）具体的な改良案が示された場合の留具の種類を文字および描画から判断した.(改良箇所総計208)

23）注５）実践授業報告書参照.

24）注８）製作した改良服（村井良妃製作）の検証.（改良服の着用者には写真掲載等の許可を得ている.）

25）改良服のイラスト（描画）に示された改良に関する数を抽出した.注５）関連内容記載.

26）改良服のイラスト（描画）からポイントになる箇所を抽出した.注５）関連内容記載.

【引用文献】

奥村若奈・夫馬佳代子．（2018）．衣服の留め具と着脱支援に関する衣服教材の開発．岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究，20．79－87.

土屋明代・夫馬佳代子．（2014）．中学校家庭科におけるユニバーサルデザイン教育の提案―生活実態をもとにした教材開発と実践授業報告―．岐阜大学教育学部教師教育研究，10，199－210.

古田典子・夫馬佳代子．（2005）．家庭科における生活創造能力の育成を目指した授業実践―創造と自己解放の家庭科教育（４）―．岐阜大学教育学部研究報告教育実践研究，７，103－114.

古田典子・夫馬佳代子・杉原利治．（2005）．生活創造能力の育成を目指した授業の分析①課題の捉え方の推移―創造と自己解放の家庭科教育（５）―．岐阜大学教育学部研究報告,教育実践研究　　７.119－128.

夫馬佳代子・古田典子・杉原利治．（2005）．生活創造能力の育成を目指した授業の分析②　人間形成としての「あそび」の観点の推移―創造と自己解放の家庭科教育（６）―．岐阜大学教育学部研究報告，教育実践研究，７，129－138.

山浦はるか・横山真智子・夫馬佳代子．（2016）．中学校の家庭科におけるユニバーサルデザイン教育．岐阜大学教育学部研究報告，教育実践研究，　第18巻，199－210.

村井 良妃・横山 真智子・夫馬 佳代子（2019）．中学生を対象としたユニバーサルデザインの教材開発（1）－教材用衣服の製作をもとにした補助教材冊子の作成－ 教育学部研究報告 自然科学 43 107-116 2019年3月.

河田祐里，夫馬 佳代子（2016）高齢者用衣服の考案 - 寝たきり状態の方が着用する快適な衣服開発の事例 - 岐阜大学教育学部研究紀要（自然科学） 40 165-173 2016年3月.